

— 香りを流すホテルや、ショッピングセンターなどが増えています。

アロマオイルを拡散器・噴霧器、ディフューザーで流すサービスは、「香りの空間演出」とか「アロマサービス」とか呼ばれています。流すアロマは、サービスを企画する企業と実施する企業が相談し、ふさわしいものを決めます。天然の精油をブレンドしたものが中心ですが、合成香料などを使っているところも少なくありません。

2008年ごろから増え始め、いまではオフィス、デパート・ショップなどの商業施設、美容院・病院・福祉施設、駅・図書館・水族館などの公共施設、結婚式や葬儀などの儀式、舞台演出など、あらゆる空間に広がっています。

草分け的な企画会社のアットアロマ(株)(東京都世田谷区)は、内外2000カ所以上で実施と自社のサイトに記しています。

— 香りサービスをしている図書館もあるのですか。  
たとえば(株)図書館流通センターが指定管理者になっている神戸市立の7図書館です。そのうち東灘図書館の場合、毎週火曜日と金曜日をアロマ・デーとし、1階の記

コラム

## アロマ・精油・香料

「アロマ(芳香)」「アロマオイル」は二つの意味で使われる。一つは「香りのよい物質」という意味で、精油(後述)・天然香料・合成香料のほか香水・化粧品・ポプリオイル(ポプリを作る際に香りのベースとして少量加えられる、合成香料を含む芳香用オイル)なども含まれる。もう一つは「精油」という意味だ。

「精油(エッセンシャルオイル)」は、植物に含まれる香り成分(化学物質)を、蒸留などの方法で抽出した揮発性の液体。100%天然の、複数の成分から成る混合物で、香料などに使われる。同じ植物から採っても、生育の地域や時期によって成分は異なる。

「香料」はほとんどが人工的に合成された香りのよい化学物質(天然もある)。複数(ときには何十も)の成分をブレンドした混合物として、食品や化粧品・日用品などに用いられる。同じ種類の香料なら成分も同じだ。



ここ数年、街を歩いていて、ふっと流れてくる香りに気がつくことが多くなった。それもそのはず、個人で楽しむだけでなく、ホテルやショップ、駅や交通機関でもサービスとばかりに香りを流すようになったからだ。

※このシリーズは問答形式にしました

イラストレーション/伊藤ハムスター

# 香り空間サービス



東京・渋谷区神宮前のアットアロマ社直営店。(撮影/筆者)

載台横で香りを流し、2階(正面壁際)では音と香りの「おもてなし」をしています(注1)。  
また兵庫県三田市では、市立図書館の本館で「三田をイメージした香り」を噴霧器で流すサービスを昨年8月に始めました。精油は市内に住むアロマセラピストたちが市のまちづくり活動支援助成金

を受けてつくり、2カ月ごとに更新しています。

— なぜ多くの企業が導入するようになったのですか。

低成長の時代、他社と異なるサービスをして業績を上げるねらいでしょう。「消費者が香りそのものに代価を払う時代になり、香りは有効な販売促進手段になったのです」と香りサービスの企画会社は売り込んでいます。

— 効果は上がっていますか。

導入した企業からは、「好評をいただいている」「客との会話のきっかけができた」「再来場する客が増えた」などの効果が報告されています(オリジナルなアロマを流しているホテルなどでは、そのアロマを販売している)。

ただ、いずれも感覚的な評価で、具体的にどれほどの収益増加をもたらしたかなどのデータは見たことがありません。また従業員は、「香りは長時間働いていると感じなくなる」という反応がほとんどです。

神戸市の7図書館は14年7〜8月に利用者にアンケートをして、1819人から回答を得ています。それによると、香りサービスに「気づいていた」は22%にすぎませんでした。「わからない」が47%とものとも多く、「アンケートで気づいた」が32%でした(注2)。